若狭国武拝三人ニ
一 三百四十四拝ニ渡切ル事 三人ニ百六拝ニ渡シ
武拝三度ニ
あまり三ツ ヨリ渡シ 武拝の内八百の
内前ハ仕上世話方屋敷方業者勝業者家
溝の親方ニ流シ家平鄙須切屋久
拝四人ニて
一 武百三十四拝六渡切ル事 三人ニ百六拝ニ渡シ
拝三度ニ

以上合六拝ニ人ニ百四十七ツ書入拝八渡切ル事

慶恵九年

四月ニ記シ置ト以ハ ヒ 記シ置ト
他能舟ニ出来ト附ハ
大他能舟ニ出来ト
唐ニハ屋敷ト有浦の
人有り付ハ 遠ニて 長敗セ 世留置て
己ニ志の至ニ
腹中ハ森ハ安能船ハ 白ハ 世俗の
廣場ト鄙ハ

潢羅の河水を投げ急流に人民驚き怪
色と救うんと思ひて龍にて おろうと甲斐も
なく波百尺所にてくらされて世人と救うん
とて龍の龍ることさ物ものうてい とて底原と
ゆうふうふ毎年百百龍毎と流て清水い
ろうろう今ふ流ろうとそ南国ふ行し此の侍ろん
知ろうんなるもの若人ろうう垣花他龍を
立て救えいろうろうと云う世内底原と奇ろうとて蒲
と葦れ葦ふ色もて河の中に入ろうの百百

隙時ろうとろう我国を是るや敵ろんを時ろうも
ちもとと以へともたいとてあるの葦に他ろう
中のうて色を見いもちと谷角ろう也百百
他ろうろう給ふめいもちと云事を箕の形成
他ろうもて示云ろん

竈廻を内葉江谷ろう時ろう事

四月廻とて毎年十月郡の村中を人の西原
掃地と月ろうもあろう世内ふ馮氏葉江氣を
清常西原ろう時ろう事を大源谷親方として

那覇の里主職一人の妻世所より位の故より
世里主那覇の筆者四役を使い行変る
祝てしめ今に伝ると云う

秋盛芽合仕上世治
附南蛮渡唐之事

平世南蛮之渡唐
南蛮親雲上重漆

尚賢王世代
順治二年丙戌二月先世徒流備後之子両治

六年為必償之朝貢不絶如朝貢右備後お償之見南有存者れ可異伸出之由
故安藤氏古役義風之親之賀親波其来一面
伸情為飛右世中芽合秋盛楚上松之貢
一年取之遣于流州有多利潤平云之中先
法国嘉其言先虞為大和之市潤面諸市之取
奉行頭物市右法つとん諸奏流州仕上世
某之国之指解之代渡可貢芽合為主取安賀
親儀貢芽合六于月国中年丁丑葉彦上于

廣府貢代銀十二貫目有多利故為褒賞
賜黒糖舶一番唐土立出奉行頭目九郎兵衛也

尚賢王世代

順治元年乙未為進貢泉州橋永所云相逢唐船
同年丙子泉州府前云庫有賀治郎兵衛
也乞賜之帰于本國此其時時貢物買
秋糖為多之褒賞白銀二貫目也
世代目順治二丙戌ちまりれ山小屋住して
毎年貢物動留〳〵綱〳〵とうら用水れあ

堀と井戸とうらうと〳〵為ろう其間除今よ
あり時間命も笑ふうそ時ろうとそ水れと
面目他〳〵也〳〵面目命と云〳〵〳〵うろ所て
節ま桑と〳〵ぶう其堀今ま有さてまうれ
山と〳〵て面目まうろう方廟まと云人の順命
うて和云と世門永山池城山とてあり永山と
ちくを池城山と云を世方屋まうれ山の門毛氏
池城と云人よまうらうあ〳〵〳〵ちう物云ろう
とうら

普天間拝て時附百万遍唱し来
南無阿弥陀仏南無高麗乃法方人西蘭しけ
きし実家うて有ちさと流唐怪ちふとうり
吋ふ素氏書友谷親方と云人世也と同て高ち
王殿ふ参し上ち人時ち法友ふふ高ち上ち
普天間権現ふ来拝し仏神ふ伝合て実
家ふ有ふ[illegible]と那し[illegible]ち孫り
唐弦洗勝し所ちや貴紙元若都鄭を
境ふ為て浄土今ふ絶ふ寺ふ百万遍とて
阿弥陀宮前ちてうるとうり弥陀稱号
一百万遍唱満ちうち同し[illegible]元故ふ書友谷
乃合ふとや

瓦焼時し来

南国ふ瓦と焼時乃来し泊首唐人ち去和志
万切国博村ふ居住て国去万切去玉博村り
知りてもしむと之り市博地谷ふ渡和義之
らと有て世唐人の子孫ちそ世唐人に渡り
子孫代し市村し乃ち渡ふ配ちそ世乃

やはり今も渡加賀嶺として其末國橋村に有
り毎年十二月廿日に紙を焼て祖
霊の為と云元唐人の遠祖と云り紙を流
す事也

淘焙りの事

有薩摩に高麗人居住尚豊の君に仕へ府の
内一度一六三度と云三人の高麗人と供に
来て遣有て本國に帰て淘を焙り古させ
る成れて一宮二宮三宮と唐府に帰
り

り一六と云て我國に止る片賀谷を仲地筑
に移り切阿波瀬村安波瀬接親と云人に女子と
書に婿とする元本國淘の焙りを子孫
泉崎濱國に濱り居て有是故南國の淘の
業と云高麗と云所也

鰐焙りの事

薩氏安里嶺登に為講曰
安里接に渦川國分郡と人曰鰐淵六郎兵衛
云し國分郡紀合戦に敗て二十舟將に唐府時

逢遇風濤玉城湾に在て親見世既歴数年
要ニ而古謂る女世一宮故雍雍妻子ハ絶后後ハ普
つ寺村宗元寺有所普請漆上漆勤焉云く
世人後て若狭所ハ後て麻嬢と称と云ふ
年代しらず
渡瀬之事
世ゝ渡瀬と云ふ玉城乃下ハ有もしハ
浜乃ゝ渡と称乃九右ハ後て城孤妻と
称うんと用ゝ云ふ人ゝ渡と云ふ

繋乃石ゝ有ゝ所ゝ之ゝ
頃亘親見世ハ有ゝと云ふ

垣花之事

世有玉城乃ゝ云人玉城ハ切垣花村ゝ世有
村乃下田原と云所ハ有て村とゝ云ふ
垣花と云ふ麻氏世有親世之部溝田

大城按司玉武世有玉城乃城是南村浦添
乃宮按司下ゝ世ゝ主一旦攻撃玉武ゝ敵
玉武為派石主ゝ横難出而於

稲福當ヤ注給力ヒ、我場ニ自分一子ヒ大城ヒ子
ヒ、家永樂九年辛卯生ヒ、父母最初稱東國世公携ニ
玉城百姓拍拍村ヒ人
引ヒ、家寵ヒ故ヒ玉城百姓拍拍村ヒ色移世ヒ
主當知ヒ又遊拍拍ヒ廻慶ヒ和志百姓拍拍ヒ不
因ヒ敷藝ヒ俄百ヒ人民ヒ沈ヒ後ヒ世ヒ
藪路成人村脇俗同拍拍
さんちいの滿世事
さんちいの滿とて濱ヒ乃ヒ拍拍世
あり給ふさんちいの滿と云事ヒ名濱ふ

表南風とて女ヒ百我朝ふあり給ふ
ふ森ヒ乃ふ初云ヒ
ふ森ヒ乃事
世ふき森ヒ乃右ヒふしき森ヒ云ヒ
森ヒて右ヒ森ヒ乃ヒ人ヒ給ふ世ヒ
城ヒ繁ヒ乃事ヒ得ヒ乃記ふヒ人ヒ
了樓注森得ヒ記
琉球國中山王
尚清天次王ヒ世ヒ拍同ヒ

みまに國のうちにあるかぎりの
あらゆる森林に城にまきて切りて國に搬運
元禄五年壬申春東須上下地方の惣
かりのうへ城にこしけてうちやきうち
寛清元祿二年癸丑四月四日己酉日に所潜右
こさみの切きみ〜もうちうへまうちうい
りもうちやうこをうふあらゆる森林へさ森
〜らこもまーらたしうちあけうちへ
ちこいけうちあみーまーりんあの

もんせけうち國のまんあけうちへあの
ちよりうちへあのさうくのとて先うちあもう
ちうて祈りもうちやうりふとうもふ長
いくさもやいてと
王加那志むうたいはりこのーーもうちやうの上下の
拂国下国拂て千家のみたい泊てありまき
長老坊主九拂て地かくめのけよりいあのさ
りもうの惡鬼納のうちさやかしこ所潜右者の
汗鄙ぢのかのうち守石ちうまーしうさやこの

[illegible]

一番の物や首里御城御守一番れを名数

番一番の物又南風原ちまそい大里知念佐敷

玉城ちやめのをやかさのちるから屋き番

城ふちりてうちやこうちもやま御

ちくめしちちやり

御御門みきしこ御世ちてちやら根原原の

屋ふふうちやめむいきちくましうくま

大明嘉清元年二年六月大吉日

世ゆすくち屋三人

奉行一人

屋き番城の屋根又根立い川の水れかまと

三人小添の親雲上城宮のちやくとい主城親雲上

うちやめむちちちくち屋根ちへ

めいのちちの事

城宮親雲上まいりき

内宮親雲上まとく

東風平親雲上御

のうきれちやくとうまいう

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

後小西て岩穴あり形ち其小似り古の仏なめいりをとと石屏と云り安置て佛像を安置をとゝ人とも敬拝して凡人後ち寺を建陽も古り来りて石と岩穴を有祖敬を諸り建立と云来り古来を

住吉の事

神祇を石りて置を建立をとも霊験知人多し天順治六年再建立をと凡いとり其様又図

琉球国中山府垣内村裏に有住吉左の神を一社其為霊地千歳青松を中に弟頭徐波を上意を

首里王城近隣神寺。

権現絶景石所に勝れ也原文曩者霊地石知何代何年誰人也恭惟治経世歳月を云二俗を荷沈故神庭敗壊を石敬風日見可思平村司俗者親を云家重有祈陰を風志和村民を門敬之竹東茶戒を勧施使原之攻を石成を温故為新神明石頭式伏預上様を後様建図石勧

石碑面字清虛玄奘玄難面今重幸方玄康
健武運亨通歷代永保君民安亨作異後日家
重方心災國災澤石後世文枝樂子孫長盛風
調雨順穀成紀國中無災禍之厚村裏遊疫
之害二十時大清順治十六年歲次己亥季秋月
大吉祥日面位陳海寺法師賴之奉行後日墨之
家重方之玄年親面之面位後國敬寺棺方信郡
頼慶記要
泊殿之康熙三拾四丙子麻氏後日親之清明七位
川門乃方那在那乃兩人主取て勸をうて乗建
をとこう
世外きしきしきもの中嘉方きさの法拾八ち
陸九に記
一 親見世乃事　一 同所行うさの事
一 同所月境候之事　一 日面門松之事
一 親見世月宵清水市候市城に上作事
一 同所方あしきしらきの事
一 同法若年者之事

一 同所仮人門事 前八五日数已日数四日数とて三数ありとゝ人〻
一 同所仮屋事 前八家平野頃若按屋東屋西屋と云〻
一 大和橋目〻事
一 兵奥南〻事
一 市仮屋守〻事
一 同所南〻事
一 久米代表〻事
一 破壊殿〻事
一 形〻〻事 前八英傷蕊と云〻
一 玉井殿〻事
一 東海道〻殿門〻事
右那覇中舊事 同所〻中事以合如形

市殿作品上

康熙四拾八年己丑十一月

屋敷城登之　池宮城城登之
潮城巡視之　新垣親雲上

唐榮邑前有一江潮汐來朝以為明堂南望之則峰巒繞抱以為錦幢奥山聳秀以為文案後與左右則樹密園以為玉屏且中島之西有一塊大石

此之一石在泉崎西而係于唐榮風水由是康熙十二年癸丑紫金大夫金正春恐有経歴久遠而為人所破題請幸蒙

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

俞久始屬唐榮

峙對南門以為龍珠南門以為龍頭雙樹以為龍角雙石以為龍眼中街蜒蟠以為龍身西門以為龍尾而邑中有一條小港潮水往來以佐其威焉且于泉崎橋之西有二大石從江中起能鎖急流之氣而大有情矣如此數者固係夫風水之理也非輕矣遺老傳云久米村南有里閭俗叫大門其前有空地形如半月古人以為龍頭于其左右置雙石為龍眼植雙樹為龍角以里中大街之蜿蜒為龍身以中嶋水邊之圍岩為龍珠蓋其龍者陽物也靈物也功勿以死屍出入是門若以瀆其靈則必龍怒以起颶風而為國家之災矣其說傳來已久矣于順治七年庚寅使者新納形部文身亡公朝不言其說遂以其棺槨自某門入而葬之未幾某有愚作又康熙四十八年己丑有愚蠢人夜出珠新屍于是門是年七次作颶風以致大饑

琉球志略云久米村舊為普門者寺地明洪永門賜閩人三十六姓居之奥山作案辻阜為屏泉崎水縈帶其間中嶋石阜立如卯真所謂天馬行空鬼樂相生俱帷幃重疊氊褥未借乃港堤突出圓廣如唇加以木石分植宛以龍形有文明之

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

象允宜簪纓甲諸村而從髦輩出嶄然見頭角也

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library